分科会報告　D分科会

●テーマ：環境共生住宅と素材

●司会：山中路代（富山県建築士会、東海北陸ブロック会女性建築士協議会 運営委員長、(株)創建築事務所 企画設計室長）
●アシスタント：五郎美由紀（富山県建築士会）　●出席者：30名

主旨

身近な地域のこと、次世代につながる将来のこと、グローバルな地球のことも含めて「環境共生」を考える。3人の方々から「環境共生住宅」に関する発表をしていただき、建築における環境の基本原則、住まい方、地域らしさなどの話を伺った後、温暖地域・寒冷地域・中間地域で取り組む姿や、「地域の素材」として木・土・和紙・人を含めた取り組みを伺った。

発表「環境共生住宅と素材」

コメンテーター：篠 節子（東京建築士会）

「環境」についての基本原則、世界の変遷、環境問題、地域らしさ、暮らし方などの総論。南北に長い日本は、世界でもまれな多様な気候を有しており、地域によって大きく違う。地域に相応しい環境共生住宅をめざすには、地域の気候の特性を理解して、地域で育まれた素材・知恵・伝統的な技術を取り入れる配慮が大事である。「地域らしさ」「多様性」という言葉がキーワードとなり、次の発表に繋がっていった。

事例発表1「高知の住まいづくり―温暖地域」

コメンテーター：山本直子（高知県建築士会）

高知県は、森林面積が8割超、日照や降水量が全国1位の地域である。伝統的には強い雨風から住まいを守る5寸勾配の屋根、水切り瓦、深い庇などの工夫がある。現代においても高知の杉・檜材、土佐漆喰、土佐和紙を当たり前に使い、「環境共生住宅」という言葉を改めて使う必要がないほどである。「環境共生住宅」＝「地域らしさ」としての事例では、1980年代からの「土佐派の家」の活動があり、住まい手である県民に広く認識されている。さらに、森林資源をもっと活かせるよう、また、伝統技術職人がもっと評価されるよう、さまざまな取り組みを進めている。

事例発表2「寒冷地における環境共生住宅の取り組み」

コメンテーター：篠 節子（東京建築士会）

福島県南会津町の公営住宅湯ノ花団地での取り組み。夏の風通しや冬の日照を確保し、冬季の雪深い暮らしとの共存において、雪割りによる落雪屋根や積雪時の土間空間などいくつもの工夫がある。自然環境や舘岩村の生活に対応した住まい、場所性や地域性を考えた住まいづくりのほか、木材の有効利用を通して、職人の新しい技術や伝統工法を見ることができる住まいづくりである。「人との協働・交流」という地域のコミュニケーション力を発揮した取り組みである。

事例発表3「いしかわの住まい―中間地域の住まいと素材」

コメンテーター：矢尾志津江（石川県建築士会）

石川県は、冬は雪が積もり、夏は厳しい暑さで湿気も高い。四季のほか、梅雨・みぞれを加えた6つの季節で「いしかわの住まい」を考えている。県産材による外壁日射遮蔽ルーバー、冬季でも豊かな空間となる半屋外空間など、「いしかわエコハウス」の説明をされた。

また、石川県の「地域の素材」には能登ヒバや能登の珪藻土がある。能登半島の3/4は珪藻土で構成され、日本の埋蔵量の7割以上を占めるという。

「いしかわの木が見える建物推進事業」による木の活用や、「いしかわ森林環境税」による森を守り育てる仕組みを通し、県産材や素材についてさまざまなことを理解し、伝えていくことも大切であるとの報告であった。

今後の取り組みについて

- 地域を知り、「（我慢する暮らしではなく）ほどほどの暮らしができる環境共生住宅」をめざす。
- 「地域の素材」は環境共生住宅を構成する要素の一つ。素材を正しく理解し、発信していく。
- 各建築士会で今まで取り組んだ「環境」に関する研究を外に向けて発信する。
- 環境共生住宅を考える上で、「暮らし方」はとても重要。住まい手とのコミュニケーションを通し、暮らし方の工夫による環境共生住宅をつくる。
- 住宅をつくる過程で関わる人たちとの交流や連携、さらに人と人とのネットワークを通して「地域の環境共生住宅」を広げる。

●D分科会の成果物